平成 27 年 12 月 22 日

尼崎市長
稲村和美　殿

一般社団法人　日本建築学会近畿支部
支部長　門内輝行

尼崎市庁舎の改修に関する要望書

拝啓　時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴市におかれましては、兵庫県尼崎市東七松町 1 丁目 23-1 に位置いたします尼崎市庁舎の建物について、建物を補強する改修工事を計画しておられること、仄聞しております。

尼崎市庁舎は 1962（昭和 37）年に竣工したもので、1984 年（昭和 59 年）に増築されました。設計者は、当初部分、増築部分ともに当時大阪を拠点として全国的に活躍し、後に文化勲章を受章した建築家の村野藤吾（1891 - 1984）です。その建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、戦後の日本における歴史的建築として高い価値を持つ建物であります。

こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められておりますが、その際、オリジナルの建物の価値を損ねないような細心の注意を払ったデザインが必要になります。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の歴史的な価値を保つための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げる次第です。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

平成 27 年 12 月 22 日

尼崎市庁舎の建物についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部
近代建築部会主査 笠原一人

1) 建築の概要

兵庫県尼崎市東七松町 1 丁目 23-1 に位置する尼崎市庁舎は、1962 年 10 月に竣工したものである。鉄骨鉄筋コンクリート造で、低層部は地下 2 階、地上 2 階、高層部は地下 2 階、地上 9 階、市会棟は地下 1 階、地上 3 階建てとなっている。竣工当時の延べ床面積 22,319.54 ㎡（増築は含まない）。設計者は当時大阪に建築設計事務所を構え、全国的に活躍した村野藤吾である。施工は藤田組（現：株式会社フジタ）が担当した。その後、第 2 庁舎（北棟）および議会棟の増築が計画され、1984 年までに竣工している。

尼崎市庁舎の建設計画が始まったのは 1950 年代初頭にさかのぼる。当時尼崎市は、戦前の尼崎尋常高等小学校の校舎を市庁舎として使用していた。だが人口の増加に伴い部局数や職員数も増え、手狭となったため、市庁舎の新築が課題となっていた。

市庁舎新築計画が本格的に動き出すのは、1958 年のことである。同年、市議会内に新庁舎建設特別委員会が設けられ、市庁舎建設に向けての予算案や敷地選定の調整が進められた。そして 1960 年 1 月に橘公園とその周辺を敷地とすることが決定されている。当初、橘公園とその周辺、国鉄尼崎駅近くの市民グラウンド、名神高速道路インターチェンジ付近の 3 箇所が候補に上がっていた。しかし、人口の重心に近いことや発展度の高い地区にあること、交通の便のよさなどが理由となり、最終決定された。

敷地と予算の調整に平行して、設計者の選定が検討された。当初、指名設計コンペを行なう計画だった。しかし最終的には、設計コンペではなく特命によって、設計者は村野藤吾に決定された。「本市の基本方針の構想と合致するアイデア、独創性、卓抜なる設計技術、実績等より」（『市庁舎工事関係書』昭和 34 年 4 月～昭和 35 年 3 月、尼崎市）、村野が新市庁舎の設計者として選ばれた。

現在は、竣工当初に比べて、窓のサッシがアルミ製のものに取り替えられていたり、部屋が仕切られて細分化されていたりするなど多少の改修の跡は見られるが、外観からインテリアまで、竣工当時の姿をよく残している。建設から 50 年以上が経っており、歴史的な価値を有する。

なお当該建物は、1964 年に、建築主と設計者と施工者の三者による理解と協力に基づいた優れた設計および性能を持つ建物に対して贈られる BCS 賞を受賞している。また当該建物の設計図は、その草案とともに京都工芸繊維大学美術工芸資料館に収蔵されている。2005

年の第 7 回村野藤吾建築設計図展でそれらが展示され『村野藤吾建築設計図展カタログ 7』（京都工芸繊維大学美術工芸資料館発行）に記録されている。2012 年に尼崎市で開催された「建築家村野藤吾と尼崎」展にも、それらの資料が展示され、多くの市民が訪れた。

2）建築史学上の価値

2-1）デザイン的価値

当該建物は、低層、高層、議会の 3 つの棟からなる。低層棟には、市民のための窓口業務のための諸室や「市民ホール」と名付けられた市民のための空間が配置されている。高層棟は、事務棟として使われている。この配置については、村野が「市民と市が毎日接触するのは主に低層部分で行われ、外部とあまり接触しない仕事をするところはすべて高層部分に集められている」と説明しており、村野が意図的に機能ごとに棟を分けてデザインしたものである。

3 つの棟はいずれも灰色のタイル貼りで、いわゆる装飾を排除したモダニズム建築によるものだが、随所に抽象的な形態を用いた、しかし凝ったデザインが見られる。例えば、外壁を見ると、すべての棟において、窓と柱の軸線が重なるように配置されている。つまり、窓のすぐ背後に柱が見え、内部からは柱の背後に窓が見える。通常、尼崎市庁舎のような鉄筋コンクリートの柱梁構造（ラーメン構造）の建物では、窓は柱と柱の間の壁面に割り付けられるが、ここではそのような常識が覆されたデザインとなっている。構造力学的な問題があるわけではなく、技巧的な独自性の高いデザインだと言える。

窓周りの外壁は、3 棟ともに、水平や垂直の細かな部材を組み合わせたデザインで覆われている。また低層棟の建物廻りにはベランダが巡らされ、欄干が取り付けられているが、そのデザインもまた、和風でありながらモダンで、独自のものとなっている。このように、建物の外壁や外観には、抽象的な形態を用いた繊細なデザインが認められる。

また、「市民ホール」の配置にも独自性が見られる。低層棟の 1 階から 2 階にかけて、吹き抜けのある大きな空間が設置されている。天井からはトップライトを通じて光が差し込み、ペンダントライトが吊り下げられるなど、居室のような演出が為されている。

この巨大なホール空間は、ヨーロッパの庁舎建築に見られる伝統的な空間を意識したものだと考えられる。ヨーロッパでは 17 世紀以降、庁舎建築の屋内に平土間の大きな室内空間として造られた「市民ホール」が備えられるようになった。その事例として、オランダのアムステルダム市庁舎（1655 年）やスウェーデンのストックホルム市庁舎（R.エストベリ設計、1923 年）、オランダのヒルベルスム市庁舎（W.M.デュドック設計、1930 年）などがある。

当該建物が建設された当時、日本の庁舎建築には「市民ホール」が設置されていたが、その多くは、丹下健三らが考案したガラス貼りのピロティ形式による開放的な空間としてデザインされていた。それに対して、当該建物の「市民ホール」は閉鎖的な空間となって

おり、その空間の質が異なる。そこには、前述のヨーロッパの伝統的な「市民ホール」に共通する独自のデザインが見られる。

また低層棟や議会棟が、池に囲われて配置されていることにも特徴がある。この池は、形状から見て、かつての尼崎に存在した尼崎城の堀をイメージしていると考えられる。あるいはこの池は、当該敷地に元々ため池があったことを暗示しているとも考えられる。

このように当該建物は、外観から内部にいたるまで抽象的な形態を組み合わせたモダニズム建築であるが、様々な方法を用いて、同時代の通常のモダニズム建築とは異なる豊かさを持つものとなっている。特に低層棟は、外壁の凝ったデザイン、棟の周辺に巡らされた池、そして内部の「市民ホール」部分まで、独自のデザインが見られ、非常に高い価値を持つ。

2-2）村野藤吾の作品としての価値

当該建物の設計者である村野藤吾は、1918 年に早稲田大学建築学科を卒業後、大阪の渡辺節が主宰する渡辺建築事務所に入所し、それ以来大阪を拠点とした。1929 年には大阪に村野建築事務所を開設し（1949 年に村野・森建築事務所に改称）、商業施設、オフィスビル、住宅、学校施設、美術館など、全国各地で数々の建築の設計を手掛けた。その作品は日本建築学会賞や日本芸術院賞、BCS 賞などを受賞している。また村野は、1955 年には日本芸術院会員となり、1967 年には文化勲章を受章するなど、日本を代表する建築家としてよく知られている。日本建築家協会会長、イギリス王立建築学会名誉会員、アメリカ建築家協会名誉会員としても活躍した。

2005 年には宇部市渡辺翁記念会館（1937 年竣工）、2006 年には広島世界平和記念聖堂（1953 年竣工）、2009 年には村野が増築部分の設計を担当した東京の高島屋東京店（1952 年竣工）が、それぞれ国の重要文化財に指定され、また 2009 年には村野が修復および改修設計を担当した迎賓館本館（旧赤坂離宮／1909 年竣工／1974 年修復改修）が国宝に指定されるなど、近年村野藤吾の作品は文化財としての価値が高く評価されている。

尼崎市庁舎は、村野が最も数多くの建築設計に取り組んでいた時期のもので、庁舎建築としては、戦前の大庄公民館（旧大庄村役場／1937 年）、戦後の横浜市庁舎（1959 年）に次ぐものである。そのデザインは、前述したように、同時代の建築作品と比較して独自のものとなっているが、それは村野特有のものとして捉えることができる。

例えば、前述したような、3 棟すべてに見られる抽象的な形態を組み合わせた外壁は、繊細かつ技巧的なもので、村野の建築作品に共通して見られる特徴であるが、同じデザインが村野の他の建築作品に見られるわけではない。当該建物だけのオリジナルのデザインとなっている。それは、すべての建築作品において異なるデザインを施すという、村野の独自性を表わすものである。

また低層棟には、独自の空間的な特徴を持つ「市民ホール」が設置されているが、これ

と同じような空間が、村野が設計を手がけた横浜市庁舎や宝塚市庁舎（1980年）にも見られる。村野の庁舎建築に設けられた「市民ホール」は、丹下健三によって考案された開放的なものとは異なり、完全に屋内にあって大きな居室のように造られている点に大きな特徴がある。それは、村野独自のデザインだと言える。

村野は、1930年にシベリア経由でヨーロッパとアメリカに建築の見学旅行に出かけているが、その際最も大きな感銘を受けた建築作品が、ストックホルム市庁舎である。ストックホルム市庁舎は、建築家 R.エストベリの名作として世界的に知られているが、ここには「青の間」と呼ばれる平土間の巨大な居室のような「市民ホール」が設置されている。こうした伝統的な形式を備えたストックホルム市庁舎に、村野は庁舎建築の基本的なあり方を見出し、戦後の庁舎建築設計の際に、同様の「市民ホール」を設置したと見られる。

このように当該建物は、設計者の村野藤吾の建築作品としても、非常に高い価値を持つものである。

3）期待される活用

前述のように、尼崎市庁舎は、同時代の他の建物や庁舎建築に比較して、外観から内部に至るまで、独自のデザインを持ち、また設計者の村野藤吾に特有のデザインが見られる。高い歴史的かつ文化財的な価値を有する建築だと言える。このような優れた建物が失われるようなことがあっては、我国の建築文化にとっても大きな損失である。

当該建物のような鉄骨鉄筋コンクリート造の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の世界的な潮流となっている。世界遺産の登録などを行うユネスコ（UNESCO）の諮問機関であるイコモス（ICOMOS）は、2011年6月に「マドリッド・ドキュメント」を採択したが、その中で、鉄筋コンクリート造の建築を中心とした20世紀の歴史的・文化財的建築について、「リビング・ヘリテージ」という概念を提示し、積極的に活用し使い続けていくことによる建物の保存を提言している。ただし、そのための改修に際しては、オリジナルの建物の歴史的、文化財的価値を可能な限り損ねない工夫やデザインが必要となる。

尼崎市庁舎においては、低層棟を中心に、耐震改修などが計画されていると仄聞するが、その際には、前述した当該建物が有する独自の価値を損ねないように、とりわけ慎重に取り組む必要がある。そうして初めて、イコモスが提唱する「リビング・ヘリテージ」を実現することができる。

村野藤吾の建築作品に、目黒区総合庁舎（旧千代田生命保険本社ビル／1966年）がある。この建物は、千代田生命保険相互会社が2000年に破たんした後、目黒区が買い取り、改修して2003年から目黒区の庁舎として活用しているものである。この建物も、耐震改修が必要となったが、大きな特徴を持つ独自の外観に影響を与えないような工夫が凝らされている。このような名建築の価値を損ねないように耐震性や機能性を改善しながら保存活用さ

れている事例は、全国各地で増えている。

尼崎市庁舎は、竣工当時の機能を大きく損なうことなく、現在に至るまで使い続けられ、高い歴史的文化財的価値を維持している。今後も、建物が持つ歴史的、文化的価値を保存・維持しながら、機能性や耐震性を高め、活用されることが望ましい。それにはデザイン的または技術的な工夫が必要である。多角的なご検討と叡慮により、当該建物の保存と活用が計られるよう切望するものである。

【尼 崎 市 庁 舎】

尼崎市庁舎　1（撮影．笠原一人）

尼崎市庁舎　2（撮影．笠原一人）

尼崎市庁舎　3（撮影．笠原一人）

尼崎市庁舎　4（撮影．笠原一人）

尼崎市庁舎　5（撮影．笠原一人）